

【ちがさき丸ごとふるさと発見博物館基礎講座から】

茅ヶ崎人物史外伝

－茅ヶ崎人として知るべき人物は－

平山 孝通^(*)

はじめに

本日は、人物でみる茅ヶ崎の歴史を考えましょう。外伝と記しました。正史に対する補助の歴史と考えてください。

初めに、茅ヶ崎市民栄誉賞の皆さんをご紹介します。8人の方が受賞されています。

受賞順にお名前をあげましょう。宇宙飛行士の野口聡一さんはスペースシャトル「ディスカバリー号」で活躍しました。2度の宇宙飛行を成功した宇宙飛行士の土井隆雄さん。ソフトボール選手の三科真澄さんは2大会連続でオリンピックに出場して金メダルを獲得しました。中日ドラゴンズ一筋、200勝投手で沢村賞受賞の山本昌広さん。プロテニスプレイヤーの杉山愛さん。若大将・加山雄三さんは、東海岸小学校の校歌を作曲しました。出口彩香さんは女子ワールドカップに出場し、ベストナインに選出され大会3連覇に貢献しました。

最後は、サザンオールスターズのリーダー桑田佳祐さん、様々な活躍で茅ヶ崎の名を全国に広めました。

以上、8人の方々の茅ヶ崎との関係は、ゆかりの人物館での展示で多くの市民の方々がご堪能されたことと思います。目にすることの難しい価値あるゆかりの品々を収集・展示に努力した担当者の方々に敬意を表したいと思います。

「ラスカ茅ヶ崎」が平成27年(2015)11月20日に新装オープンしましたが、それに併せて『茅ヶ崎ウオーカー』(KADOKAWA)が発行されました。平成版の「茅ヶ崎事典」です。表紙には茅ヶ崎出身の俳優・松坂桃李さんとサザンCが大きく載っています。松坂さんのインタビュー記事もあります。

「地元自慢ランキングベスト50」にはえぼ

し麻呂・マナブウ初め多くのキャラクターの紹介、商店の紹介欄では商店主のお顔もみられます。最新の茅ヶ崎人を知ることができる大変便利な本ですので、ご覧になることをおすすめします。

それでは、以上のことも含めて、本論に入ります。

初めに、申し上げますがすべての方を歴史上の人物と捉えますので、敬称は省略しますのでご承知ください。

材料は、『茅ヶ崎市史』『茅ヶ崎市史・現代』『写真集』『史料集』『茅ヶ崎市史ブックレット』『茅ヶ崎市史研究』『ヒストリアちがさき』を中心に、そのほか「新聞記事」、自治会及び郷土史家編集の『郷土史』『茅ヶ崎市史文献目録』などを参考にすすめます。

まずは『茅ヶ崎市史』5、『茅ヶ崎市史・現代』5・6、『茅ヶ崎市史ブックレット』9の各巻の「索引」をみましょう。かつて、市史編さん担当の永井武彦非常勤嘱託職員に市史関連の人名の整理をお願いしました。地道な作業でしたが、その甲斐があつて、1570人という人物が確認できました。今後、茅ヶ崎ゆかりの人物を検討する時の基本資料となります。

古くは神話時代の英雄・倭建命、鎌倉時代の征夷大將軍・源頼朝、その弟・義経、その家来武蔵坊弁慶、江戸時代の寺社奉行・大岡越前守忠相、歴代の村長・町長・市長、結核療養所・南湖院高田畊安院長とその関係者及び入院患者、郷土史家、健康優良児の赤ちゃんなど実に多彩な人名が上がりました。

しかし、その中で歴史上の人物として、茅ヶ崎の成り立ちに深く関わり持つ人物を数百人にしぼりました。時代的には明治・大正・昭和の

人物を取り上げれば、人物でたどる茅ヶ崎の歴史を考える上では十分かと思います。

しかし、最近の例を考えれば2000年、平成12年8月19、20日の両日市営球場を満員にしておこなわれた「サザン里帰りライブ」、茅ヶ崎出身のロックスター・桑田佳祐の活躍も見逃せません。桑田のこのライブがあらためて、「茅ヶ崎」を全国に知らしめることとなったのも事実です。2014年年越しライブ「ひつじだよ！全員集合！」でのその年11月に受賞した「紫綬褒章」に関わるパフォーマンスの件など話題は豊富なようです。やはり平成の人物も検討しなければなりませんね。

「著名人」と茅ヶ崎の歴史を考える上での「ゆかりの人物」との境目は非常に難しく、その人抜きにしては茅ヶ崎の歴史が語れないという人物の選択が必要となります。そのためには茅ヶ崎の大きな歴史の流れを理解することが不可欠でしょう。

1 茅ヶ崎人物史外伝

それでは、人物を中心に茅ヶ崎の歴史を振り返りましょう。

実在の人物だけでなく伝説の人物、民話の主人公も登場しますので、「茅ヶ崎歴史物語」「茅ヶ崎文化史」「外伝」として聞いてください。

① 茅ヶ崎の曙（縄文時代～8世紀前半頃）

茅ヶ崎の文化のあけぼの、それは茅ヶ崎の北部の小出丘陵にその端を発します。縄文時代前期（約5500年前）の西方貝塚や縄文時代後期（約3500年前）の堤貝塚には、太古の人々の生活の痕跡があります。これらの貝塚からは、縄文人が何を食べたのか、言いかえれば茅ヶ崎の海で何が捕れ、小出の山で何の実が採れ、そこではどんな獣を捕獲していたのかがわかります。そしてどのような道具を使い、どのような信仰を持っていたのかなど、徐々にですが解明されてきました。

顔はみえませんが、茅ヶ崎最古のゆかりの人

物はこの頃からしっかりと足跡を遺していました。あえて、名付ければ「西方貝塚人」、「堤貝塚人」とでも呼びたいものです。貝塚に向かって「おい」と声を掛ければ、振り返ってくれそうな気がします。その手には小出の山で捕獲した鹿の角を加工した釣り針を持ち、まさに茅ヶ崎の海に糸を垂れんとする縄文人の日常生活が目に見えそうです。

市域には先土器時代・縄文時代・弥生時代から近世・近代にかけて220ヵ所ほどの遺跡があり、全域に先人の足跡が遺されています。発掘された土器の多彩で細やかな紋様は実に美しいものです。

神奈川県立茅ヶ崎北陵高等学校の丘陵の南側に大きな記念碑が立ち、「七堂伽藍跡」と読めます。七堂伽藍とは、寺院を構成する主要な7つの建物（塔・金堂・講堂・鐘楼・経堂・僧坊・食堂）を有する大寺院のことで、この碑の周辺一帯には「七堂伽藍跡」と呼ばれるような大寺院が建立されていて、周辺では1トンを超す礎石（柱を建てる土台石）がいくつも出土しています。昭和53年（1978）の茅ヶ崎市史編さん事業に関わる発掘調査で、灯明皿や大量の古代の瓦が発掘され、その紋様から相模国最古の寺院である可能性が考えられています。寺院の屋根瓦を葺く瓦職人たちのざわめき、僧侶たちの荘厳な読経の声が響く小出の里、津（港）の跡も発見され多くの人々の交流、文物の流通などが目に浮かびそうです。下寺尾に接する香川村の名はお寺のお香のかおりが漂うことに由来するようです。香川人の日常が彷彿とされる茅ヶ崎の貴重な地名伝承の一つといえます。

同高校校舎の新築に伴い校庭の発掘調査を実施したところ、古代の役所である高座郡衙の遺構（7世紀末～8世紀前半）が出土しました。高座郡は茅ヶ崎市から相模原市にかけての広い範囲ですが、その中心といえる役所の組織がこの丘陵にあったことがわかりました。県内4例目の郡衙の発見は大変貴重なものです。また、弥生時代の外周を溝で囲う環濠集落も発見さ

れ、外周工事に汗を流す弥生人の存在も忘れられません。県内では出土例の少ない鉄製の斧や勾玉の未完成品などが発掘されました。未完成品が発見されたことは勾玉職人がここで作業を続けていた可能性があります。茅ヶ崎ゆかりの職人第一号ともいえるかもしれません。

数千年の間に多くの人々が、小出丘陵に足を運んだことは確かです。

伝説上の人物としては英雄・倭建命(日本武尊)も忘れてはいけません。命は茅ヶ崎の最北部芹沢の腰掛神社の御祭神として祀られています。東征の折、ここを通過され、その時に腰を掛けたといわれる石が残されています。

残念ながら、この伝説は明治時代になって、天皇中心に考える国粋主義に基づいて、地域の識者によって創られた小出地域統合のための新しい伝説ではないかと考えられます。

江戸時代後期の天保12年(1841)に編纂された地誌『新編相模国風土記稿』には、「芹沢村の鎮守なり、大庭の神腰を掛し旧跡と云伝ふ、小石一顆を置神体とす」と記すのみで、命の名前はありません。『古事記』にももちろんこの記述はありません。

明治19年(1886)編纂の地誌「国誌下調」の芹沢村の沿革に「口碑相伝景行帝ノ時皇子日本武尊東征ノ命ヲ蒙リ相模ヨリ上総へ颯セントシテ道此地ヲ過グ、今尚本村社内一大石ヲ存ス是其休憩スル所ナリト」、「所在芹沢村字下馬、官司石腰姓が氣になります。石腰姓の発生はいつ頃なのでしょう。茅ヶ崎において日本武尊は130年前の記録「国誌下調」に初めて登場します。

②中世の茅ヶ崎（平安時代後期～室町時代）

茅ヶ崎が文献上歴史にあらわれてくるのは、平安時代末期のことです。

「大庭御厨」に関わる資料の中に記されています。大庭御厨とは鎌倉権五郎平景正（景政など表記は様々）が開発した茅ヶ崎から藤沢にかけての広大な所領（東は俣野川、西は寒川、南は海、北は藤沢の遠藤付近。腰掛神社の神、大庭の神の支配の範囲でしょうか。）を、伊勢神宮の神領として長治年間（1104～6）に寄進したものです。それは信仰によって一族の結束を深めることと伊勢神宮からの庇護を受けるために寄進したものといえます。この地域は大庭野と呼ばれる原野で野生の動物がたくさん生息していました。

鎌倉権五郎平景正は名前からみて、鎌倉に拠点を置き、館を構える武家の棟梁の一人と考えられます。出自は桓武天皇に繋がる平氏の末裔です。平氏の末裔が開墾して、伊勢神宮に寄進した土地に、源氏の末裔が乱入して事が起こりました。

時は、天養元年（1144）9月8日に、鎌倉に館を持つ源義朝（頼朝の父）の郎従・清原安行、三浦義明ら1千余騎の軍勢が御厨に進入して、神官を殺害して作物を刈り取るなどの事件が勃発しました。源氏の再建に努めていた義朝の行動の一端と考えられるので、単なる乱暴狼藉といえない面もあります。その詳細は伊勢神宮に伝わる『天養記』（天養2年）にみえます。香川の地名の初出資料としても重要です。

この『天養記』のレプリカが、神奈川県立歴史博物館に展示されていますが、茅ヶ崎の歴史上重要な資料は、県の歴史でも同様なのです。

その義朝乱入の後40年ほどを経て源頼朝によって初めての武家政権である鎌倉幕府が成立しました。

頼朝の挙兵までを簡単に振り返りましょう。時には利害が対立して、源平・親子・兄弟・叔父甥などが袂を分かちました。

保元の乱（1156）では、鎌倉権五郎平景

正のひ孫の懷島平太景義と大庭三郎景親の兄弟は源義朝に属して活躍しました。その後の平治の乱（1159）においては平清盛と敵対して破れた源義朝は東国に逃れる際に殺害されました。しかし、義朝の3男頼朝は清盛の継母・池禅尼の口添えにより伊豆に配流され、のち北条氏などの援助を受けて挙兵し、弟・義経らの活躍で源平の合戦に勝利し、鎌倉開幕へと繋がる主人公に成長しました。その後の頼朝・義経の兄弟不和の物語は相模川の橋供養へと繋がってゆきます。もし、池禅尼の口添えがなく頼朝が斬られていたら、歴史は大きく変わっていたことでしょう。

治承4年（1180）8月の頼朝の挙兵においては、兄・景義は源氏に属しますが、弟・景親は平氏に属し兄弟の運命は大きく分かれてしまいました。

のちに景義は作事奉行（10月9日）として鎌倉の頼朝の居所の造作に関わり、また、政子の鎌倉入御（11日）の役目に携わり、鶴岡遷宮の指揮を命ぜられる（12日）など重臣として活躍する場が与えられました。円蔵の神明神社付近に居を構え、懷島の領主、茅ヶ崎の中世史の中心人物として史書『吾妻鏡』に多くの記録を留めることとなりました。

一方、景親は片瀬川において梟首（26日）されてしまいました。

次は文化史でみてみましょう。

市文化資料館の門柱に、砥上ヶ原（茅ヶ崎から藤沢にかけての地域）で西行（鎌倉時代の僧、『新古今和歌集』を代表する歌人）が詠んだと伝えられる「芝まとう葛の茂みに妻こめて砥上ヶ原に牡鹿鳴くなり」（住む人も疎らなこの広い原野に妻である牡鹿を呼ぶ牡鹿のもの悲しい声が響いている）の歌が刻まれています。この門柱は元は国道134号に建てられていたもので、資料館の開館に伴いその門柱として再利用されたものです。縄文人は鹿の角を用いて釣り針を作りましたが、西行は鹿の声を耳にして、もの悲しい、もの寂しい秋の情景を歌に残しま

した。この背景は『西行物語』に記されています。（大磯の銘菓「西行」饅頭はこの物語に由来しているのでしょう。）

また、随筆『方丈記』を著した神官で歌人の鴨長明も「浦近き砥上ヶ原に駒とめて片瀬の川の潮合いを待つ」（海に近いここ砥上ヶ原に馬を止めて、片瀬川を渡る潮時を待っている）とやはりこの付近の情景を詠んでいます。

『平家物語』などの軍記物や市域を旅する人の記録の中に、相模川、懷島（円蔵・浜之郷・矢畑付近）、砥上ヶ原、八松ヶ原などの地名が散見しています。

下町屋の国指定史跡・同天然記念物の「旧相模川橋脚」は、建久9年（1198）12月下旬、源頼朝の重臣・稲毛三郎重成がその亡妻（頼朝の妻北条政子の妹）の供養のために架け、その渡り初めに頼朝らが参列したものです。鎌倉幕府の威信をかけた大がかりな架橋事業と考えられます。橋は亡妻のいる彼岸とこの世である此岸とを結ぶ架け橋との意味も有するもので、橋の文化史的側面を考える好例といえます。

晴れの渡り初めの帰途、一転頼朝は落馬してしまいました。その原因は、自らの命令で手にかけて安徳天皇を初めとする平家の公達、弟・義経、その従者武蔵坊弁慶らの亡霊に驚いての落馬と伝えられますが、その真相は不明です。

南湖の御霊神社には義経が祀られ、鶴嶺八幡社の参道脇には弁慶塚が祀られていることから、茅ヶ崎のとくに南湖の人々にとってはこのあたりで亡霊に驚いた頼朝が落馬したと信じられていたのかもしれませんが。また、浜之郷の龍前院は多くの市指定文化財を管理しています。墓域の一面の「五輪塔十基」は一名「二階堂十人墓」といわれ、頼朝に殉じた十人の武将の墓との伝承があります。五輪塔の銘文が削り取られているのも意味ありげに感じます。五輪塔の組合わせに疑問を持つ方もいますが、長い年月の間の災禍によって何度も崩れ、その度ごとに村民の手で積み直されたものかもしれません。真相は永遠に不明ですが、落馬の翌年1月13

日に頼朝は53歳で亡くなりました。

『吾妻鑑』が伝える頼朝の死は、亡くなった年の3月11日の記録に「故將軍四十九日の御法事なり」とあり、死に関する記述はみられず、いきなり「四十九日」を迎えます。

頼朝の相模橋への「渡御」と鎌倉への「還路」に及びて御落馬あり。幾程を経ず薨じたまいぬ」という史実をもとに周辺の住民によって一連の伝説が語り伝えられたのでしょうか。

側近が誤って刺殺した、恨みを持った家臣に切られた、北条氏との確執があった、愛人丹後局とエナ塚の伝承も微妙、12月下旬の寒いさなか脳卒中による落馬、もともと糖尿病があった、毒を盛られたのではないかなどといろいろな推測がなされていますが、ともあれ、頼朝の死は普通の死ではなかったのでしょうか。『吾妻鑑』の編纂は鎌倉時代の末期で、北条氏が権力を振るっていた頃、当然北条氏への批判には触れることはできません。頼朝の死を挟んだ3年間の記述の欠落は、北条一族の思惑が隠れているのでしょうか。当時の茅ヶ崎人が噂したであろう頼朝伝説の材料には事欠きません。

「史実」と「伝承」の発生を考える良い事例といえます。

二代將軍頼家は庭野での狩りや相模川での鵜飼いを楽しみ、三代將軍実朝は頼朝ゆかりの「相模橋」の修復を命ずるなど茅ヶ崎との関係を歴史書の『吾妻鑑』より読み取ることができます。

これも伝承ですが、浜之郷村の鶴嶺八幡社の建立に関与したのは源頼義。その子八幡太郎義家がイチョウを手植えたことになっています。義家の4代あとに頼朝・義経の兄弟が誕生しています。歴史的事実だけではなく伝承の世界を含めて、浜之郷・円蔵・矢畑を中心とする懐島界限には源氏ゆかりの物語がたくさん伝えられています。源平の系図をもって茅ヶ崎の中世史を語ることは十分可能といえます。

時代は飛びます。天正18年(1590)、豊臣秀吉は後北条氏との小田原合戦に勝利して

天下統一事業が完成しますが、その折、堤村や懐島三ヵ村などにあてて兵士の乱暴狼藉などを禁じた「禁制」を発給しました。市域に伝来する中世の古文書としては堤村あての「禁制」が唯一のものです。

茅ヶ崎の歴史も「中世」から「近世」へと大きく動き始めました。

③近世の茅ヶ崎（江戸時代）

徳川家康によって、慶長6年(1601)に東海道（現国道一号）が整備されました。

東海道を上り下りする旅人にとって、沿道の松並木・一里塚・本陣・脇本陣・旅籠・茶屋・寺社の山門や参道、海に目を転ずれば姥島や平島、遠く望めば左不二の雪景色と長閑な風景が目に入ってきたことでしょう。

「左不二」は浮世絵に何種類も描かれました。

茶屋町付近から下町屋にかけて東海道はゆっくりと右に曲がって、鳥井戸橋を渡ります。橋より千ノ川の延長線上には雄大な富士山が望まれ、今まで右手に聳えていた富士山が左手に変わりました。これが左不二です。東海道で、ここ鳥井戸と吉原宿（静岡）の2ヵ所にしかない名所です。左手に見える所はほかにもありますが、川に架かる橋の上から左手に見える富士山が左不二です。茅ヶ崎八景の一つ「鳥井戸の夕照」にも描かれています。

文人・太田蜀山人は南湖立場の脇本陣の江戸屋（十間坂・重田家）で味わったなますや松露の印象を書き留めています。とくになますは美味だったのでしょうか「南湖魚鱠」と題する一編の詩をつくり賞賛しています。相模川（馬入川）の項には「水浅くして、砂清し」「かの鎌倉殿正治元年の事など思い出さる」と記し、600年余り前の頼朝の渡り初めにおける落馬を回顧しています。落馬の件は旅人の筆に記したいほど著名な事象だったのでしょうか。蜀山人は享和2年(1802)2月に茅ヶ崎を通過しました。

相模川の河口に位置する柳島湊は対岸の平塚の須賀湊とともに、河川に集まる米・木材・薪

炭などの物資を江戸へと運ぶ海上交通の要衝でした。ここには廻船問屋があり、そのうちの一軒、藤間家の幕末から明治維新にかけての当主・藤間善五郎（柳庵）は漢学や書を学び、学芸に秀でて、世相を著す「太平年表録」など歴史の宝庫ともいえる幾多の作品を遺しました。嘉永6年（1853）6月のペルリ（ペリー）の来航時の緊迫した状況の描写には興味が引かれます。藤沢の友人と西浦賀の高丘から遠鏡（望遠鏡）で黒船を観察して詳細にその状況を書き残しています。単なる物見ではなく江戸湾における廻船の航路の状況を確認するための行動と考えられます。

その2年後の安政大地震（1855）の被害や「ツナミ」などを詳細に記し、柳島の領主である旗本・戸田氏の江戸屋敷に参上して、主人一家の無事を確かめ、併せて孫娘の奉公先での無事を確認して、安堵した様子が伝わってきます。混乱した柳島付近や江戸市中の状況を今日に生き生きと伝えています。

藤間家に江戸時代の著名な人物の作品が伝わっているのかを考えましょう。詳細は『ブックレット』や『史料集』を参照してください。

藤間柳庵は文人としても著名ですが、その書の師・秦星池は「江戸文化番付」（文政12年、1815）によると東前頭筆頭に位置づけられるほどの書家でした。

この番付の行事役には「太田蜀山人」、西大関には「谷文晁」の名が記されています。当時横綱はなく大関が最高位でした。行司は格付け外の別格者で特別な存在です。この番付からの類推ですが、藤間家に伝わる太田蜀山人（三幅）や谷文晁の作品は、星池の関係から入手した可能性も否定できません。

藤間家には星池の書簡2通、手本6点、書幅などが残されていてその交流の親密さがうかがえます。星池は文政4年（1821）の秋に柳庵宅を訪ねて揮毫をしています。中国の女神で航海の祭祀である「天后嬢々」、廻船業を営む藤間家に相応しい書幅といえます。

天保13年（1842）から明治32年（1899）にかけての歌川豊国・国周らの430点を超す浮世絵のコレクションは壮観です。廻船業を通しての、江戸との文化交流の面を今一度検討してみたいと思います。新しい文化面での人物交流史が構築される可能性がみえるかもしれません。

幕末には寺子屋も普及しました。師匠の指導の下に寺子・筆子と呼ばれる子どもたちの読み書きの力も進み、普段の生活に加えて、俳句や和歌を愛好して、漢籍に通じるものも少なくありませんでした。

寺子屋の師匠の名前を挙げてみましょう。今宿・安藤中山、萩園・和田篤太郎、矢畑・小沢賢順、香川・坪井藤左衛門、柳島・青木治右衛門などが挙げられます。文字通り寺子屋としては、金剛院・西運寺・海前寺・常願寺・妙伝寺・宝蔵寺などでは住職が師匠となり、寺を教場としていました。

当時を彷彿とさせる民俗芸能としては、南湖の麦打ち唄、柳島のエンコロ節、円蔵の地形搦き唄、芹沢の焼米搦き唄などが地域の人々に伝えられています。円蔵の祭囃子、芹沢のササラ盆唄などの太鼓や笛の音色が夜空に消え入る哀愁を懐かしむ古老も多くいます。太鼓や笛の名人達の話も楽しいものです。

その一人、円蔵生まれの神楽の名人・高橋鯛五郎、古老は「円蔵のていさん」と呼び懐かしく語ります。

「・・・稲が実り、鎮守の森は秋祭りだ。祭り囃子に誘われて、ていさんの元気な姿がみえるようだ・・・」と昔の思い出をゆっくりと語る姿をみるのは楽しいものです。とくに「八岐大蛇の神話劇」は大人気を博しました。

ことの真偽はともかく、九代目市川団十郎に稽古を付けてもらい「市川円十郎」という名を団十郎からもらったという話もありますが、「円蔵の団十郎」と周辺の人が思うほどすばらしい神楽の名人だったのでしょう。

一方、藤沢の四谷から赤羽根・高田を経て寒

川に通じる大山街道は、大山阿夫利神社に向かう参詣者たちで大変賑わいました。俗謡に「大山千軒、須賀（平塚）千軒、南湖は360軒」と謡われるほどに繁栄していました。

小出川に架かる大曲橋（古くは間門橋・魔門橋とも）に伝わる働き者の西久保村・五郎兵衛と河童の民話「河童どっくり」は江戸時代にも流布しており、茅ヶ崎民話の代表といえます。あらすじは、次の通りです。「働き者の五郎兵衛がある日、馬の体を洗っていると、河童が悪戯をしました。一緒にいた村人が怒って河童を木に縛りつけましたが、かわいそうに思った五郎兵衛は許してやりました。その夜、河童は徳利を持ってお礼に来ました。その徳利は、いくらでもお酒が出るというものでした。・・・」、助けた河童に徳利をもらった話です。

最近、円蔵の鶴田家において、郷土史家鶴田栄太郎が、鶴嶺小学校の教師小塚源一郎に描いてもらった12枚組の河童どっくりの紙芝居を手にする機会がありました。色も鮮明に残り貴重な作品です。この民話の原点を感じました。栄太郎の妻桃世、娘蒔子さんによって大切に伝えられた郷土資料といえます。

江戸時代の書物を読んだ民俗学者で、別荘人の一人であった柳田国男も関心を示し、伊藤里之助町長に調査の協力を依頼しています。

多くの旅人が通過した東海道・小和田の「ぼた餅茶屋」、大山街道・円蔵の「鷲茶屋」、西久保の「富士塚」や「ドンドン塚」など名物・名所がたくさんあります。

大山詣でと同じく、伊勢参宮も茅ヶ崎の人には忘れられない生涯に一度の大旅行でした。留守宅では、毎日、陰膳を据えて旅の安全、お土産を携えての無事の帰還を祈っていたことでしょう。「伊勢道中記」に旅の顛末を垣間みることができ、平安末期より大庭御厨として伊勢神宮に関わりを持ち続けた茅ヶ崎人の必然性を感じます。市内に点在する神明神社は伊勢神宮の末社として今でも信仰の対象になっています。

④近代の茅ヶ崎（明治～大正）

茅ヶ崎の近代化を推し進めたのは誰でしょうか。初代の町長・伊藤里之助とその周辺の人たちです。駅の開設に自分の土地を提供しつつ奔走し、別荘の誘致に積極的にかかわったのも伊藤です。別荘人である考古学者の坪井正五郎一家の「茅ヶ崎在住日記」には、坪井が伊藤より野菜などの提供を受けたり、坪井が茅ヶ崎を発つ時には挨拶に赴くなどの記述が散見します。

仲間と計っての駅の積極的誘致、名士に対する別荘地の斡旋、南湖院の開院も伊藤の行動力とビジョンがあつての結果といえます。駅・別荘・南湖院と、どれをとってもその後の茅ヶ崎の発展に不可欠なものばかりで、茅ヶ崎の近代化は伊藤を中心と人々の夢の結果といえます。

また、明治から戦前に200程の別荘があつたという研究も検討を有する必要があります。

というわけで、明治29年（1896）には、医師の須田経哲が茅ヶ崎小学校の南に、翌年には九代目市川団十郎が小和田に別荘を構えました。団十郎別荘では多くの弟子を養成し、団十郎はここで没しました。団十郎別荘の建設とその死去は茅ヶ崎の名が広く知られる最初の切っ掛けとなりました。別荘から茅ヶ崎駅までの団十郎の葬列の段取りは、団十郎を慕い茅ヶ崎に居を構えた川上音二郎の献身的行動として語り伝えられています。

その後、高級官僚や軍人・学者などが別荘を構えるようになりました。また、明治31年（1898）6月15日に茅ヶ崎駅が開設されると別荘・海水浴、後述する南湖院へ入院・見舞いなどのために多くの人が訪れるようになりました。

東洋一の施設を誇った結核療養所の南湖院は、駅開設の翌年にクリスチャンの医師高田畊安が開院しました。林屋（山本格三）・釜成屋（岩沢）などの商店が出入りし、入院患者であつた大井新が退院後に駅前に写真館を開き、同じく患者であつた信州出身の小山房全が、香川・萩園・十間坂・今宿など地元の蘗を原料に

製糸工場・純水館を経営するなど、南湖院は地域の発展に深く関わりを持つこととなりました。小山は茅ヶ崎商興会、信用組合、郵便局の設立などに積極的に関与して商工業の活性化に尽力しました。後に文化勲章を受章し、名誉市民の1人であった画家の小山敬三は義弟です。

なぜ、茅ヶ崎初めての大工場といえる純水館ができたのでしょうか。

まず、地元で豊富で良質な繭が入手でき、きれいな水が湧き、工場敷地の取得に町長らの協力が得られました。貿易港の横浜までの交通の利便性など、好条件が重なり、健康面が危惧される小山夫妻にとって茅ヶ崎の気候も幸いしました。純水館は勤務体制、健康管理、福利の面をとっても模範的工場といえる環境を維持して、工女も300人を越えることもありました。

なお、純水館の開館記念の一つは盆です。十間坂の加明堂・加藤小梅眼科医院に残されていました。加藤医院は製糸場の職業病とも言える眼病の医師として勤めていました。

数百種類に及ぶ南湖院の絵葉書が発行されていますが、大井の関与は大きかったようです。大井の写真館は今でも駅前にスタジオを構えていて、遠足の写真は大きなカメラを担いだ大井写真館と思い出す子どもも多いはずです。

南湖院ゆかりの文化人は、国木田独歩・平塚らいてう・八木重吉・前田夕暮・吉田千秋・坪田譲治など多彩で、とりわけ独歩の病状は、『読売新聞』などに度々報道されたため、団十郎別荘の開設に続き、茅ヶ崎の名前を広めることとなりました。独歩の見舞客である田山花袋・真山青果などは茅ヶ崎館に泊まることも多く、文人仲間による騒がしい追悼の宴もここで開かれました。南湖院と独歩の関わりは田山の随筆『東京の三十年』を参照しましょう。

一方、郷土史家の先駆者として、のちの郷土史家に多くの影響を与えた鶴田栄太郎のエピソードを紹介します。茅ヶ崎人が体験した唯一の南湖院での独歩の思い出が記されています。

「文学青年の鶴田さんは世田谷の徳富蘆花を

訪ねた。蘆花は茅ヶ崎からの来訪者を快く居間に通した。話題は入院中の独歩に及び、帰りがけに蘆花は鶴田さんに独歩への言づてを託した。独歩の入院費をカンパするために単行本を出版し、印税を贈る準備をしているというもので、それは『二十八人集』という28人の文壇仲間による文集である。鶴田さんは南湖院を訪れた。独歩は鶴田さんの見舞いにはじめはげんそうな顔つきだった。蘆花の話に及ぶとうなずいたという。その頃の独歩は骨と皮だけにやせ衰え、鶴田さんの目には、いやに頭ばかり大きい人という印象だったという。面会は10分程度だったが、尊敬していた独歩の身の回りが、光り輝いているようで、すっかりあがってしまい部屋の様子などはあまり覚えていない。しばらくして再び見舞いに出かけたが、すでに独歩の病状は進み、看護婦から、気分があれでいて院長先生と大げんかして殴りかかったほどですので、お会いにならない方が、と止められ引返した。

鶴田さんは、所用からの帰り、一里塚前の交差点で、独歩の野辺送りの行列とぶつかった。行列は夜のとばりが落ちかけた街角を火葬場へと向かって静かに進んでいった。わずか20人ほどの寂しい列だったが、作家の田山花袋、劇作家の真山青果の沈んだ姿が見え、鶴田さんも列に加わった。」

茅ヶ崎人の「独歩体験」を記しました。まず蘆花を訪ねたこと、10分ですが、南湖院の病室で独歩と対話したこと、偶然ですが野辺送りに同行したこと、その列で田山花袋・真山青果の姿に接したことなど、もしも鶴田さんにお会いできれば何度でも伺いたいことばかりです。

南湖院は多くのスタッフによって維持されていましたが、副長の高橋誠一、河野桃乃などは日記や独歩の追悼文などを残しています。高田院長は日曜学校・映画会・医王祭（クリスマス会）などを地域の住民に開放して文化的貢献をしていました。

医王祭で劇に参加した思い出を語る方々も年ごとに少なくなっています。小野間正・角田と

し子ども兄妹には、医王祭の楽しさ、お弁当の美味しさを何度も語っていただきました。高田院長の生前の様子を知る数少ないお二人といえるでしょう。医王祭の土産には院長の著作や絵葉書などが含まれていました。最近、「医王祭」とスタンプが押された絵葉書を手にする機会がありました。

「団十郎別荘の建設とその死」に続き「独歩の南湖院入院とその死」は茅ヶ崎の名を有名にする2回目の端緒になりました。

海浜旅館として著名な茅ヶ崎館は、茅ヶ崎駅開設の翌年、明治32年に開館して、多くの海水浴客の宿となりました。明治40年代に宿泊客用の記念絵葉書として作成された「茅ヶ崎八景」（吉岡班嶺画）は風景画の代表作品の一つといえます。林屋・釜成屋でも八景は作られましたが、それらは伝わらず。当時の絵が残るのは茅ヶ崎館のみです。

また、班嶺の富士山を描いた作品が1点、柳島の藤間家に所蔵されていますが、詳細は不明です。茅ヶ崎館に逗留して「茅ヶ崎八景」を描き、請われて柳島から見た富士山の作品を残したと想像ができれば茅ヶ崎絵画史の一コマとして楽しいものです。班嶺の年譜などで事績を検討すればヒントが得られるかもしれません。

茅ヶ崎館には世相風刺のオッペケペー節で一世を風靡した川上音二郎や日本の女優第一号といわれるその妻貞奴らが舞台稽古をして、劇作家・江見水陰との交流もみられたようです。かつて『学校教育だより』に小川稔茅ヶ崎美術館長が「郷土の先駆者を追い求めて」を寄稿して、音二郎・貞奴、書誌学者の斎藤昌三に触れたことがありましたので、参考にさせていただきたいと思います。斎藤は晩年、市立図書館名誉館長を務めました。その蔵書の一部は市立図書館の「斎藤昌三文庫」として貴重なコレクションの一面を占めています。

茅ヶ崎館は、戦前から映画監督の小津安二郎・野田高梧ら映画関係者の定宿となり、多くの脚本が書かれ、多くの俳優の出入りもみられ

ました。

茅ヶ崎館は関東大震災でほぼ倒壊してしまいましたが、辛うじて浴室は倒壊を免れ、浴室と震災後に再建された一部分が、平成21年（2009）市域第一号の国登録有形文化財（建造物）になりました。因みに、第二号は藤間雄蔵家です。

さて、第三号といえば、旧南湖院の第一病舎（竹子室）でしょうか。明治32年の建物ですのでその歴史的・建築学的価値はあります。独歩もこの建物を目にしているはずですので、文学史的にも価値は認められます。まず、建築学的調査を実施し、図面・写真の所在調査、関係者の聞き取りと課題は山積みですが、専門家の協力を得て、楽しい仕事にしたいものです。

近代の最後に、今年没後100年を迎える文豪・夏目漱石に触れます。

その大事件は明治43年（1910）8月に起こりました。伊豆の修善寺温泉で胃潰瘍のために転地療養をしていた43歳の漱石は多量の吐血をして危篤状態になりました。「修善寺の大患」と呼ばれる大病の時のことです。

次男・伸六の『父夏目漱石』から引用しましょう。

「・・・8月18日の夜である。菊屋の別館に滞在していた松根東洋城さんが、急を東京に告げた為だが、折から暑い真夏のこととて、子供達と一緒に、避暑先の茅ヶ崎へ出向いていた母（鏡子）も、その後を追う様に廻送されてきた電報を見て、その翌日、修善寺にかけつけたのである」とあります。後に元気になった漱石は小品集『思い出す事など』に、「十間坂下にいた子供達は、砂深い小松原を引き上げて、修善寺まで見舞いに來た」と記しています。

漱石の思想上の一大転機となったといわれる「修善寺の大患」の時、急を知らせる妻宛の電報は東京の本宅から廻送され、茅ヶ崎の十間坂下の宿で受け取りました。

文学史の一コマとして記しておきます。

⑤現代の茅ヶ崎（昭和～平成）

現代に入り、画家の萬鉄五郎、小山敬三、三橋兄弟治、書家の水越茅村、井上有一、作家の開高健、城山三郎、作曲家の山田耕筰、俳優の上原謙、その子の加山雄三、歌手のサザンオールスターズの桑田佳祐、宇宙飛行士の野口聡一・土井隆雄など多彩な人材との関わりがみえます。市民栄誉賞の受賞の方は冒頭で触れましたので、ここでは割愛します。

文化活動の拠点として、茅ヶ崎市民会館、茅ヶ崎市美術館、市民ギャラリー、図書館、文化資料館、公民館、青少年会館、コミュニティーセンター、松籟庵、氷室椿園、ハマミーナ、ゆかりの人物館などの文化施設や生涯学習施設・社会教育施設の充実が計られ、そこを拠点に多くの文化活動を楽しむ市民の増加がみられます。いつの日か茅ヶ崎から全国へ、そして全世界に発信する文化活動が花開くことを期待したいものです。

一方、文化活動の拠点をハード面にとらわれることなく、ソフト面での事業展開も計られています。その一つとして「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」事業があります。この事業は市域全域を屋根も柱もない博物館に見立てるもので、文化・歴史・自然・産業・指定文化財・人材(古老、郷土史家、画家、書家、写真家、漁師、農家、大工棟梁、屋根職人、教員、政治家、編集者、コレクター、スポーツ振興者、国体選手、箱根駅伝選手、高校野球選手・監督、戦争体験者、震災体験者等々、諸分野の方々における「一人一話」の発掘)などの諸事項(これらを「都市資源」と定義)を幅広く選び、市民自らが、調査し、研究し、市民の共通財産とする市域再発見事業です。茅ヶ崎に存在する人・物などの全てを対象とする「茅ヶ崎学」と言い換えてもいいものかもしれません。

「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」は、日本はもとより全世界に向けて茅ヶ崎を紹介する強力な仕掛けの一つといえるようです。

⑥祭り・年中行事と茅ヶ崎

皆さんお一人お一人に、誕生日があるように、また、忘れがたい記念日があるように、茅ヶ崎市にも生活の節目となる祭りや年中行事がたくさんあります。

毎年4月の中旬に開催され市全域で盛り上がる祭りがあります。江戸時代の名奉行の一人である大岡越前守忠相の遺徳を偲んで開催される春の一大イベントの「大岡越前祭」です。以前は「大岡祭」と呼ばれていましたが、桜の盛りの頃なので、桜の花の祭の「桜花祭」と勘違いをする方もいるとか、名称変更の理由の一つとなったようです。

祭りの初日は堤の大岡家の菩提寺・浄見寺で墓前祭が行われます。東京在住の大岡家のご当主及び関係者の参列のもとに近在の住職が集まり法要が営まれ、市民の参列も多く線香の煙が終日墓前より絶えることはありません。門前には地元の模擬店も開かれ小出地区の活性化に一部寄与しています。数年前には、本堂で近世史の専門家による大岡越前守に関する歴史講演会も開催され大変な賑わいをみせました。市指定文化財である旧和田家住宅の土間で開催される地元郷土史家と茅ヶ崎郷土会有志による大岡家関連写真展に足を運ぶ市民も多くいます。

大岡越前祭は、大正元年(1912)11月大岡忠相に従四位の官位が贈られたことに由来しています。子孫に当たる子爵・大岡忠綱が忠相の墓前に贈位の報告を行い、それが契機となって翌年「贈位祭」が挙行されました。これは浄見寺住職・菱科顕順、小出村長・布川元治郎、茅ヶ崎町長・伊藤里之助らが呼応して始めたものです。大法要が行われ、講談、地元有志による奉納相撲、花火などで賑わいました。翌3年には「大岡越前守大祭」と名称を変更して実施され、以後、大正12年の第11回まで継続しましたが、9月1日に勃発した関東大震災によって浄見寺が大きな被害を受けたために、翌年から中止となりました。昭和5年(1930)に浄見寺は復興をみますが、その後の満州事

変・日中戦争・太平洋戦争は15年にも及び再開はいよいよ難しい状況となりました。昭和20年(1945)8月の敗戦、22年10月1日の市制施行、30年4月5日の小出村分村合併などを経て、茅ヶ崎は徐々に復興の道を歩み始めました。その中で市民有志による「全市を越前守一色にぬりつぶしたい」との計画が立てられました。商工会議所の役員小島芳太郎・武藤亮策・山口吉蔵らの提案を受け、郷土史家・鶴田栄太郎らを中心に企画が練られたようです。31年4月に復活第1回目の大岡祭が開催されました。30年の小出村分村合併が、切っ掛けの一つとなったことは否定できません。合併に関しては地域の軋轢も生じ、その緩和を目指し、小出の人々に再び地元への愛着や関心を取り戻して欲しいという願いを込めて提案された一つでもあったようです。

初日には墓前法要を行い小出地区を盛り上げ、2日目は駅前を中心に大名行列が繰り広げられ、駅前を盛り上げるという全市域を上げてのイベントとなっています。60年を経た今日も大岡越前祭は継続し、平塚の七夕祭や藤沢のふじ祭とともに、湘南の風物詩の一つとなっています。

私事で恐縮ですが、40年前の新入職員時代に大岡祭の大名行列に奴として参列し、毛槍を掲げました。衣装屋さんに髭や胸毛を描いていただいたのが、良い思い出となっています。若手の女性職員は腰元役で参列しました。

忠相は本来江戸時代の人物として取り上げるべきと考えますが、生まれは江戸屋敷、活躍したのは江戸市中、時には堤村の大岡家の菩提寺訪れたでしょうが、没後菩提寺に葬られたということが、茅ヶ崎との関わりと考えて、祭りの主人公として捉えてみました。明治維新後は、浄見寺と大岡家は疎遠となりました。これは大岡家のみならず全ての領主にいえることです。急に近代化し、旧領地との関係も分断され領主も寺も大変な時代を迎えてしまいました。維新後約40年、大正元年忠相に従四位の官位が贈

られたことで、寺と大岡家の関係が復活し、それを契機に「贈位祭」が挙行され、「大岡祭」、「大岡越前祭」にと発展しました。歴史上の人物でも祭の主人公でも、茅ヶ崎にとって、重要な人物に変わりはありません。忠相を大岡さんと呼ぶ市民も多いことも覚えておきましょう。

なお、大岡家一族の墓所は、昭和36年2月に市指定文化財第1号に指定されました。オハツキイチョウ、寺林、銅造弁才天坐像も県指定天然記念物及び重要文化財に指定されました。

次は、夏の祭り、暁の祭典浜降祭です。浜降祭は7月の海の日の日まだ明けきらない茅ヶ崎西浜海岸を会場に、茅ヶ崎、寒川地域の神輿40数基が集結して「どっこい、どっこい」の掛け声とともに砂浜を練り歩き、その何基かは、元氣よく海に入御します。以前は、7月15日に開催されていたので、祭りが終われば梅雨も明けるといわれていました。小中学校は休校、市役所も地元の職員の殆どは休みという茅ヶ崎全体の盛大な祭りでした。いつの頃から、祭りに対する意識や郷土意識も変わり参加しやすい休日の海の日にと変更されました。大岡さんの祭りと違って、昭和20年の戦争末期にも挙行された民俗色濃い地元の祭りでも、時代の変化に併せて行かなければならなくなりました。

浜降祭の起源は定かではありませんが、一説に天保9年(1838)に相模川で、あることから行方不明になってしまった寒川神社の神輿が、茅ヶ崎の浜に流れ着き、南湖の漁師・孫七が発見し、無事神社に帰ることができました。懸賞をかけて探したにもかかわらず孫七が受け取らなかったことに感謝して、寒川神社の渡御が始まりました。平成の今でも、孫七の子孫の鈴木家は祭りに先立ち、神社側の挨拶を受け、式典でも主立った役を務めています。180年も前の恩義に対して変わらぬお礼の浜降り続ける神社に対して、式典の内容、奉納する品々などは時代とともに変化しますが、畏敬の念が沸きます。「民俗行事」とは斯くあるべきものでしょうか。

一方、『新編相模国風土記稿』の「浜之郷村」の「鶴嶺八幡社」の条に「例祭 6 月 29 日、午時浜下りとして茅ヶ崎村海浜まで出興す」とみえます。中世に既にその存在が確かな鶴嶺八幡社の「浜下り」と寒川神社の「お礼参り」が合わさり、明治の初期に今日の祭りの形態が、参加の神輿数は少ないものでしたのでしょう。詳細は、寒川神社の「日誌」を参考に検討したいものです。昭和 53 年（1978）に「茅ヶ崎海岸浜降祭」は県の無形文化財に指定されました。

その他の地域の祭りとしては、1 月中旬に、地域の神社の境内や川原、畑の周辺などで道祖神の火祭り「どんど焼き」が行われます。幟を立て、正月飾りをたきあげ、三色の繭団子を焼き、無病息災、家内安全、地域安全などを祈願します。幼児や小学生の参加も多く、後世に伝えられる数少ない祭り・行事の一つといえるでしょう。以前は 14 日に行われていましたが現在は、人の集まりやすい日曜日に行われることが多くなりました。

2 月上旬の初午に行われる稲荷さんの祭りは、講中仲間の高齢化や生活の変化で維持が難しくなりつつあります。

しかし、昭和 12 年に店じまいをした製糸場茅ヶ崎純水館（ヤマダ電機付近から郵便局あたりにかけてあった敷地約 12000 坪の大工場で、工女は数百人いました。）で祀られていた二つの稲荷さんの内一つの稲荷さんは健在です。小山房全の理解者の一人である古谷平蔵の孫・ひ孫世代が大切に守り、祭りを継続しています。寒い 2 月ではなく、陽気のよい 4 月の頃合いをみて実施しています。純水館は 80 年も前になくなってしまいましたが、その工場の守り神・屋敷神ともいえるべき稲荷さんは健在で、唯一純水館の盛衰を知る遺産といえます。ご神体の由来は伝わりませんが、純水館本店のあった小諸から分祀されたのでしょうか。祭りを継続される古谷家の皆さんに敬意を表します。

都市化が進む市域では、農業・漁業にかかわ

る祭礼や年中行事が失われることが多いのですが、年中行事は地域の特徴を目の当たりに示す精神的な遺産といえます。大切にしたいものです。しかし、大切だからといって無理に残すことはご法度です。行事にも命があり絶える日がいつかは来ます。そして、次に必ず必要なものが誕生します。

以上、130 人程の人物の事績をとおして「茅ヶ崎歴史物語」をお話ししました。茅ヶ崎の歴史が日本史に繋がることがご理解できましたでしょうか。教科書に載り皆さんが知る人物が目白押しです。地域史の面白さや大切さが実感できたのではないのでしょうか。

興味を覚えた方は『茅ヶ崎市史』を繙かれ、図書館、美術館、文化資料館、ゆかりの人物館、開高健記念館などに足を運ばれることをおすすめします。

2 『新聞記事』より

茅ヶ崎のゆかりの人物関連資料の整理の折、『サンケイ新聞』に興味深い連載記事を見つけましたのでご紹介します。

その記事は、昭和 57 年（1982）5 月 11 日から 18 日に 6 回連載され、34 年前の茅ヶ崎の著名人を垣間みることができます。各人物の年齢は昭和 57 年 5 月ですので、今の年齢を考えるなら 34 を加えてください。署名記事で文章は五十嵐徹記者、写真は、平林靖敏カメラマンが担当です。「われら沿線住民」というタイトルで、「茅ヶ崎駅」の【67】から【72】です。記事ごとに人物名とそのエピソードを記し、人名に続く（ ）内は年齢と居住地です。一部省略や補足をし、敬称は省略です。

①われら沿線住民【67】

「茅ヶ崎駅その 1、茅ヶ崎文化人クラブ」（写真は、昭和初期に建てられた旧駅舎南口）

川添隆行（75 歳、中海岸 2 丁目）評論家・茅ヶ崎文化人クラブ会長・湘南文学同人・別荘研究家。

「友人が住んでいたのと家賃の安いのが魅力で住みはじめたが、当時はここから電車で東京に通うなんて常識外れだった。その意味からすれば、ボクは茅ヶ崎から東京に通勤したサラリーマンの第一号じゃないかな」時事通信記者時代の昭和16年(1941)に東京から移った。

茅ヶ崎文化人クラブは戦後まもなく創立した茅ヶ崎ペンクラブを母体に、35年文化勲章受章者の刑法学者牧野英一(故人)を初代会長に発足。地方都市でこうした文化団体が自然発生的に作られるのは珍しく、200人の会員は増えている。

楨有恒(88)名誉会長、マナスル登頂の登山家、文化功労者。

川原利也(60、幸町)眼科医、南湖院研究者、歌人、市歌の作詞者。

「31年から市民、作詞を依頼されたときは、茅ヶ崎人と認められたと、うれしかった」。

メロディーは軽快なマーチ風の明るいもので、作曲したのは「こんにちは赤ちゃん」などの中村八大(51)。実家が東海岸北、一時は自身も市民だったのが縁。「詩をみて、メロディーはスムーズに出てきましたね。詩の補作者として父(故中村和之)が名を連ねていますし、母が今も実家で健在。時々里帰りしている関係からも愛着のある曲です」。

その八大の名コンビだった永六輔(49)の実家も、東海岸南。実家をセカンドハウス的に使っている。茅ヶ崎早朝野球「若草会」のメンバーで、「スネークス」のファースト。馬入川の河川敷のグラウンドで活躍中。

弾厚作のペンネームを持つ加山雄三(45)昨年4月開校した市立東海岸小学校の校歌を無料で作曲した。東京に移って10年以上になるが故郷・茅ヶ崎への愛着は一人。

「文化人クラブのメンバーには、ほとんど土地っ子はいない。それに活動場所も大半が東京なんだが、よそに比べると地元とのつながりを大事にする気風があるようだな」と、川添は茅ヶ崎文化人を分析している。

②われら沿線住民【68】

「茅ヶ崎駅その2、南湖院」(写真は、市営野球場後方の土手に建つ独歩追憶碑)

朝倉季雄(72、南湖7)仏文学者、『スタンダード仏和辞典』の改稿者。

太陽の郷の住人、松林の中に建つマンション6階の自室からは、茅ヶ崎の青い海が視野いっぱいに広がり心地よい潮風が吹き抜けてゆく、太陽の郷は医療施設付老人専用マンション。食事から日常の健康管理までの世話が受けられ、しかも私生活も守られる。注目されだした新しいタイプの高級マンション。

太陽の郷の前身は「南湖院」という明治32年(1899)に建てられた結核療養所。最盛期は5万坪の敷地に、東洋一という設備を誇っていた。院長は敬虔なクリスチャン医師の高田畊安(昭和20年没)。患者に国木田独歩・八木重吉・平塚らいてうの姉や夫、石川啄木の娘など著名人も多い。

太陽の郷は54年にオープン。経営は医師・高田準三(51)、畊安の孫に当たる。

「皆さん表情が輝いているでしょう。ご自分の意思と資力で入られる方ばかりですからね。自立した生活を送るという点で、老人ホームとは根本的に違うんです」。将来はプールやテニスコートのほか地域交流を目的とした社交クラブも併設したい。

小山敬三(84、南湖4)洋画家、文化勲章受章者。

「17歳の時、肋膜炎で2カ月ほど南湖院に入院、フランスから帰国した翌年の昭和4年から茅ヶ崎に住む」「母が喘息で、私が小学生の頃からこの近くに別荘住まいをしていたもので、その関係から住みはじめました。松林と澄んだ空気、冬が暖かいことが気に入っています」。

青山義雄(88、東海岸北、現フランス在住)洋画家、国画会客員。

土井俊泰(63、梅田)独立美術協会員など、アトリエを構える画家も多い。

③われら沿線住民【69】

「茅ヶ崎駅その3、打出小槌町一番地」（写真は、海岸の住宅地には松林が多い。茅ヶ崎公園で）

城山三郎（54、東海岸北4）作家。

「そこは、私鉄で東京から一時間、松林に囲まれた海浜の土地であった。空気は澄み、季候も良い。冬は東京より二、三度暖かく、それでいて、夏は三十度を越す日はほとんどない」、小説『打出小槌町一番地』の書き出し。すべてフィクションと城山は否定するが、城山の自宅周辺に似ている。「文学界新人賞の受賞を機に、昭和32年（1957）の暮れに名古屋から移った。妹夫婦が住んでいて、気候が温和、緑も豊富、静かない町だと以前から思っていたもので、気軽な気持ちで引っ越ししましたね」。その後『総会屋錦城』で直木賞（34年）、『落日燃ゆ』で吉川英治文学賞（50年）などを受賞。週1回の割で東京に出ることと趣味のゴルフを除けば作家活動は自宅の書斎。午後1時間ほど、息抜きのために散歩に出るのが日課、「茅ヶ崎は人口など適正規模を超えて膨張し、住宅地まで渋滞が多くなってきた。静けさが失われたら、引っ越すことも考えています」。

島尾敏雄（63、東海岸北5）、ミホ（62）オシドリ作家。

4年前の53年頃茅ヶ崎に。市広報紙に記す「茅ヶ崎に住み着いたのは全くの偶然ですが、生活のリズムにかなうと納得している」、茅ヶ崎海岸の海浜歩道に触れて、「全くすばらしい。江の島を背に富士の山容に向かい夕日をまともに受けて歩くときなど大空を自由に羽ばたく鳥の気持ちになってしまいます」と絶賛。

（江戸時代の旅人のみた「左不二」や明治時代後期の茅ヶ崎八景に描かれた「不二」に続く、昭和50年代後半の富士山の描写。また、市内の銭湯の浴室正面のペンキ絵の富士山も忘れられない景色の一つといえる。）

開高健（51、東海岸南6）、牧羊子（59）オシドリ作家。開高夫婦に関しては、開高健記

念館を見学していただければ十分。

開高・城山の二人はたまに電車に乗り合わせると趣味の話に花を咲かせたという。

開高の隣組にサントリー時代の広告部長の山崎隆夫（76、東海岸南6）洋画家、国画会員。サイマル出版元常務鈴木豊（58、東海岸南5、詩人ゆたか・せん）は大阪出身の関係から開高とは顔なじみで、サントリー組との交際も多かった。

棟田博（72、東海岸南4）作家、市教育委員長。

『拝啓天皇陛下様』などの戦争体験をテーマにユーモラスな大衆小説作家。

前川佐美雄（79、東海岸南2）、緑（68）現代歌人協会会員、「日本歌人」主催。

松田銑（67、若松町）リーダーズダイジェスト日本語版元編集長、『ルーツ』翻訳者。

④われら沿線住民【70】

「茅ヶ崎駅その4、団十郎別荘」（写真は、鶴嶺八幡宮境内の大イチョウ、県指定の天然記念物）

九代目市川団十郎別荘が贅を尽くして開設されたことに触れつつ、地元で「団十郎山」と呼ばれる経過を説明。団十郎移住後、茅ヶ崎には高級官僚・軍人などが別荘を置くようになった。

木村義雄（77、出口町）将棋14世名人。昭和57年でちょうど住んで30年。5000㎡の敷地で「薪にしたら10年や20年は楽に持ったんじゃないかな」というほどのうっそうとした松林だった。「家族を静かな所に住ませたかったのと、ボク自身体調を崩していたものでね」。49年に脳血栓で倒れたが、今ではすっかり回復。5月には『名人木村義雄実践集』が完結、ホッと一息。

島田一男（59、東海岸南1）社会心理学者、聖心女子大学教授、市教育委員。

「31年に転居した理由も家族の静養が目的、自身も自宅での仕事が多く、静かで暖かい所に転居」、島田家は海まで300m足らず。玄関

先まで砂浜で、漁師が地引網を引いていた。手伝うとバケツ一杯のアジがもらえた。季節風が吹くと裏庭に吹き溜まりの砂山ができ、「スコップでどかすのが日課」。

間宮武（66、中海岸3）心理学者、共立女子大学教授。高村象平（76、東海岸南4）慶応義塾大学元塾長、中教審会長。木下是雄（64、東海岸6）応用物理学者、学習院大学長。野村正七（67、富士見町）横浜国立大学長。茅誠司（83、赤羽根）東京大学元総長など学者も多く居住している。

⑤われら沿線住民【71】

「茅ヶ崎駅その5、松竹映画人」（写真、砂丘状に続く茅ヶ崎の浜、地元の中学生在がスケッチをしていた）

大庭秀雄（72、東海岸北2）松竹映画元監督、「君の名は」は代表作、横浜映画専門学院講師。

「茅ヶ崎の住人になったのは戦後の26年。当時、茅ヶ崎には松竹映画人が多数住んでいた。佐々木恵介監督、脚本家で初期の小津監督作品を手がけた池田忠雄、「君の名」で縁深い柳井隆雄、いずれも故人、大船に近く、地価も手頃なところが受けた」。

茅ヶ崎と映画人との関わりは中海岸の旅館

「茅ヶ崎館」。昭和の初めから松竹脚本部がシナリオ執筆の定宿にしてきた。小津はコンビの脚本家野田高梧共々執筆のたびに投宿、代表作のほとんどはここで書き上げられた。

「部屋に長火鉢を置いて、お客さんが来るとご自分でコーヒーを入れて出されていました。女優さんたちには怖い監督さんだったようですが、子どもの私に遠出するときには”お土産は何がいいかな”と気にかけてくれる穏やかで優しい方でした」と茅ヶ崎館四代目当主森勝行

（52）は当時を懐かしむ。ほかに、獅子文六、木下順二、新藤兼人らも利用した。雑誌に紹介されて以来、最近は鎌倉巡りの若い女性客も増えた。

国鉄（現JR）のフルムーン切符のCMで往年の二枚目ぶりを見せた俳優の上原謙（72、東海岸南3）、名子役から小銭ずしチェーンの経営に転身した太田博之（34、東海岸南6）。女優の山田五十鈴（65、平和町）、SKD出身の姫ゆり子（43、共恵）、ロカビリー歌手で作曲家の平尾昌晃（44、中海岸2）、サザンオールスターズのリーダー・桑田佳祐（26、南湖）らがいる。

⑥われら沿線住民【72】

「茅ヶ崎駅その6、小和田映画村」（写真、茅ヶ崎の南北を結ぶ大踏切、別名開かずの踏切）

山根貞夫（42、緑が浜）映画評論家、映画村生みの親的存在。

「以前から茅ヶ崎に何か市民生活に根ざした文化的拠点をとっていてましてね。公民館がたまたま自宅近くにできたもので、映写会でもやれないかと相談に行ったのが切っ掛けでしたね」。公民館オープンの55年秋に第1回、以後春と秋に行う。「官製の折り紙付き名画ではなく、一般の映画館で上映が望めない、隠れた名作を取り上げるのが狙いです」。

上映作品を見ると、「東京物語」（28年、小津監督、原節子、笠智衆）、緋牡丹博徒・お竜参上」（45、藤純子・菅原文太）、「喜劇・あゝ軍歌」（45、フランキー堺・倍賞千恵子）とジャンルは幅広い。約100人収容の会場はほぼ満席。熱心なファンは東京から駆けつけることもある。

「かつての映画館にあったおせんにキャラメル的な雰囲気はここにはある」と映画監督の森崎東（54、浜須賀）、40年に引っ越すまで京都暮らしが長かった。「京都のような濃厚な地縁、血縁で繋がっているわけではなく、といってベットタウンとしてきっちり都市化されたところでもない。何か新しい人間関係が育っている街ですね」。

茅ヶ崎には積極的に映画村に参加しようとする若手映画人が多く、大嶺俊順（47、浜見平）、

川上裕通（36、浜見平）、三村晴彦（44、矢畑）らが居住する。

毎日映画コンクール特別賞の記録映画作家・小林米作（76、中海岸4）、日本テレビ「ズームイン朝」の徳光和夫（41）、TBS「奥さま八時半です」の鈴木治彦（52）、ニッポン放送「お早ようアンコー何かいいことありそうな」の斉藤安弘（41）などの人気アナウンサーが住んでいる。

経済人も多い。相鉄興業社長・土志田保則（74、東海岸北3）、三菱商事会長・田部文一郎（74、常盤町）、前日本科学情報センター理事長・岡藤次郎（73、東海岸南6）、丸善社長・飯泉新吾（77、東海岸南1）、立花証券社長・中田忠雄（53、出口町）、東海汽船社長・尾上浩彦（67、東海岸南2）らがいる。

以上は、昭和57年頃の茅ヶ崎人物誌としての貴重な記事です。このような視点で、年ごとの人物の動向を丹念に掘り起こせば、詳細な人物誌ができます。

まずは、『神奈川新聞』を検討して、他の『新聞』の「湘南欄」も参照しましょう。『スポーツ新聞』の「芸能欄」も興味深いですね。

3『茅ヶ崎革新懇記録』第3集より

続いて、平成15年（2003）12月に発足した「平和・民主・革新をめざす茅ヶ崎の会」の機関紙を紹介します。政治色が感じられる機関誌ですが、今まで紹介したものとは違った視点が得られました。

第3集（平成18年10月発行）は、「特集、人でつづる茅ヶ崎」というタイトルがつけられています。

論文の「タイトル」と執筆者、（ ）に要旨を記しました。何度も登場する人物もいますが、初めての方もいます。

執筆は人物をよく知る家族や身近な方がされています。

①「永六輔さんと茅ヶ崎」永六輔談

（佐々木良文と中瀬寛一のインタビュー。父は南湖院に入院していた。そのような関係で両親が茅ヶ崎に住んだ。）

② 父上田正三郎と茅ヶ崎」上田耕一郎

（筆者は昭和2年（1927）3月、茅ヶ崎町雲雀ヶ丘生まれ。父は教育者、児童の森小学校の分校「雲雀ヶ丘学園」（現・ひばりが丘4-10付近に開校）の校長。弟は共産党の不破哲三。）

③義人・・佐々木卯之助について」佐々木良文

（幕末に無断で村民に鉄砲場内を耕作させた義人、島流しにされたが、明治31年（1898）6月16日に伊藤里之助村長らが「佐々木氏追悼記念碑」を建立した。その日は茅ヶ崎駅開設の翌日にあたる。

良文氏は同じ佐々木姓の縁で日頃卯之助の名を口にすることが多かった。）

④耕余塾と若松幹男」小宮山直士

（豊後（大分）出身の若松は藤沢・羽鳥の耕余塾で小笠原東陽に学び、金剛院の茅ヶ崎学校（茅小の前身）で教鞭をとった。教え子の成績を嘆き割腹自殺。幼子が残され、墓は金剛院に。）

⑤「小林多喜二と茅ヶ崎」村瀬弘明

（多喜二22歳の明治14年（1925）3月に、南湖院入院中の恩師小樽高商教授・大熊信行を見舞った。多喜二はまだ無名、脚光を浴びるのはその3年後のこと。）

⑥「平塚らいてう」溝口優子

（「らいてう記念碑」の建立、南湖院でのちの夫奥村博との出会いや南湖での長女・曙生の子育てに触れる。）

⑦「黒滝チカラと松林小学校」保坂治男

（明治40年（1907）横浜市港北区生まれ、

師範学校在学中に足尾鉾山労働者の生活に触れ、激しく心を揺さぶられた。昭和4年(1929)茅ヶ崎町立松林小学校に赴任、5年11月全日本教育労働者組合中央委員に就任、6年逮捕、藤沢署で拷問の上、懲戒免職。8年、14年に治安維持法違反で起訴。13年教育科学研究会に参加、言語教育を担当。平成5年(1993)86歳で亡くなる。)

⑧「父岡崎一夫のこと」岡崎不二夫

(札幌生まれ、東大卒、弁護士、共産党員、昭和9年(1934)茅ヶ崎へ。)

⑨「父三橋兄弟治のこと」永峰千尋

(明治44年(1911)南湖生まれ、6人姉弟の1人息子、昭和5年師範学校卒業後松林小学校へ、黒滝チカラに出会い、教育活動に邁進。昭和初期の経済恐慌の中、その不条理に立ち向かう若き教師。若くして亡くなった妻(敏子)は詩人。成美学園理事、54歳で鶴嶺中学校の美術教師を早期退職。アトリエには絵の批評を求める人が絶えなかった。教えることがうまく、優しく丁寧。村田章一郎・三橋松童らと文芸誌『胎土』を、川添隆行・金子昌夫らと『茅ヶ崎文学』(のち『湘南文学』と改題)を創刊、牧野邦夫・鈴木至夫らと「茅ヶ崎美術家協会」を立ち上げ事務局を担った。野村宣・荒垣秀雄・牧野英一らが中心でなった「茅ヶ崎ペンクラブ」(のち「文化人クラブ」と改称)にも創設時から参加。音楽も大好き、ベートーベンが好きで当時大活躍したヴァイオリニストに似せた髪型をさせて娘(千尋)にヴァイオリンを習わせた。茅ヶ崎恵泉教会で毎月行われた「ラジオ・ササオカ」主催のレコード・コンサートにも娘を伴い参加。

たくさんの人との交流・音楽・詩・ヨーロッパへの憧れ、これら全てが父の絵の中に表現されているように思う。)

⑩「川添隆行さんについて」佐々木良文

(早稲田大学第二高等学院中から社研活動に参加。治安維持法違反で何度となく拘留される。昭和19年(1944)満州での日本共産青年同盟の活動を理由に、逮捕され内地に送還された。レッドパージにあい職場を追われる。)

茅ヶ崎での活動、昭和26年「相模新人物地図(茅ヶ崎の巻)」で紹介される。茅ヶ崎文化人クラブ主催で「独歩忌」を復活させる。「松籟荘」の保存運動に尽力、「『松籟荘』と茅ヶ崎のまちを考える会」の発起人となり、別荘を調べ始める。東海道松並木保存のため当時の建設省に交渉。「茅ヶ崎・平塚らいてう記念碑を建てる会」会長、事務局長は岡崎周、除幕式には他界していて参列できなかった。)

⑪「父小生夢坊と茅ヶ崎の思い出」小生富夫

(金沢市生まれ、20歳の時上京し執筆活動を展開する。オペラ界、演劇界で活躍。満州・朝鮮・蒙古・台湾・日本の五族融合の思想の下に子どもたちを集めて晴耕雨読の塾を開こうと、空気が良く、富士がみえる茅ヶ崎を選んだ。昭和15年(1940)である。菱沼・小和田南浜竹付近、現在の松浪中学校そば。塾の名は「興亜十人塾」。役場の朝倉房治総務係長が世話をしてくれた。大工は真壁、農業は熊切友吉が指導してくれた。紀行文を出版し、塾の資金に充てた。

戦後、総合雑誌『新頁』を茅ヶ崎より発行。執筆は村島帰之・賀川豊彦・奥むめを・荒畑寒村・添田さつき・添田良信などの友人に依頼。

『新頁』は戦後の占領下における検閲制度の研究上有益な雑誌といえる。米国のメリーランド大学プランゲ文庫にはGHQの検閲の対象となった5冊、茅ヶ崎市立図書館小生第四郎文庫には小生が手元に置き愛着のあった3冊が確認された。占領下の世相を伺う貴重な資料である。

戦後、初代公安委員長、松浪小学校建設委員長、同校歌作詞、図書館運営委員、病院建設委員・文化会館建設委員・広報委員長などを歴任した。

木村義雄・植村鷹千代・荒畑寒村らと「湘南会」をつくり座談を楽しんでいた。

『東京新聞』に「天狗まんだら」の連載、自費出版『民俗雑誌』の発行と精力的に仕事をすすめた。浅草の添田唾蟬坊の碑の建立、下町風俗資料館などの建設に奔走した。大山阿夫利神社の宮司と懇意となり、「天狗講」を組織して毎年5月「天狗講酒祭」を開催し、茅ヶ崎からも多くの人が参加している。

昭和61年(1986)12月、市立病院で亡くなった。91歳。多摩霊園に墓地。没後、郷土史家の野崎薫、市会議員の佐々木良文らが遺品・図書の散逸は惜しい、斎藤昌三の遺品の収集に苦勞した経過を話されたので、市への寄贈を決め、物は文化資料館へ、図書約450冊は市立図書館へ寄贈し「小生第四郎文庫」として市民の活用をみている。)

⑫「岡本花子さん(元茅ヶ崎市議)」西山正子(茅ヶ崎初の女性市議。明治44年(1911)4月東京日本橋生まれ。昭和18年(1943)夫の転勤に伴い、天津に移住、21年春引揚げ。9月に茅ヶ崎町へ、茅ヶ崎小学校のⅡ部授業解消のために立候補し26年4月初当選。以後、連続7期市議として活躍。議会運営委員会委員長、副議長、学校建設対策特別委員会副委員長などを務める。母親運動、身体障害児の救援活動、ボランティア連絡会、高齢者体操の指導、日本婦人有権者同盟などで活躍。自治功労賞、瑞宝章を受章。平成9年(1997)1月85歳で死去。)

⑬「野崎薫さんと茅ヶ崎郷土会」羽切信夫(明治35年(1902)7月萩園生まれ、大正11年(1922)12月から12年11月にかけて朝鮮で兵役に従事。除隊後は、萩園で農業に専念し青年団活動、社会事業に関わる。一方で郷土史研究に興味を持ち、昭和40年代より茅ヶ崎郷土会理事・副会長、55年より会長、老齢により会長職を辞任、顧問に。機関誌

『郷土ちがさき』の編集に尽力。「小生夢坊を語る会」会長を務めた。平成6年(1994)8月15日、92歳で死去。

編著書には『萩園のうつりかわり』『ふるさとの寺と仏像』『ふるさとの緑をたずねて』『ふるさとの歴史散歩』ほか多数。)

4『茅ヶ崎市史研究』全32号収録の人物関連論文・聞き取り抄出

昭和22年(1947)10月1日に茅ヶ崎は高座郡茅ヶ崎町から茅ヶ崎市になりました。戦前から市制施行への機運は高まっていたのですが、長い戦争と重なり、進展がみられませんでした。戦後2年目にして市制施行の日を迎え、関係者の喜びは如何ばかりのことだったでしょうか。茅ヶ崎小学校講堂での祝賀の宴は質素ながらすばらしいものだったと、当時を知る市元職員、薫品治介・水越梅二・熊沢賢三・高砂栄三郎らは誇らしく語っていました。

その後30年を経た昭和52年(1977)10月の「市制施行30周年記念」に企画されたのが、『茅ヶ崎市史』全5巻の刊行でした。市史編さん委員・市史編集員・市史協力員・市史編さん事務局が発足しました。各委員は歴史の専門家ですが、事務局の係長は30代後半、係員2名は20代半ば、出版作業の素人が編集員のご指導の下に頑張りました。印刷所などからは親身なアドバイスもいただきました。

手始めは資料の収集からです。市内を自転車で回り、協力員のアドバイスで旧家を訪問します。協力員は全てが茅ヶ崎の生まれで、育ちの方々です。純粋な「茅ヶ崎人」です。

協力員のアドバイスがなくては史料の収集は不可能といえます。協力員は、元市収入役(大地主、明治45年生、松林地区担当)、元小学校長(教え子は数多、明治22年生、小出地区・学校担当)、元市部長(部下は現役幹部、明治40年代生、小出地区担当)、大地主(先代から名士、明治30年代生)、元洋服職人(幼少から郷土史に目覚め先輩を追う、明治30年代

生、鶴嶺地区担当)など、郷土を知り尽くしていること、人脈の多さには脱帽です。

さて、資料収集を続け、古文書・資料3万点、写真絵葉書類5千点、書籍雑誌類9千点が集まりました。それらを活用して『市史』を編集するのですが、全資料が反映できるものでもありません。『市史』には反映しにくい資料もあります。一度『市史研究』で編集上共通の資料として把握する必要があります。

そのような意図の論文が掲載された『市史研究』を繙けば、新たな視点が発見できます。論文を読み詳細はご理解いただくとして、バックナンバーごとにタイトルをあげました。人物索引としても活用できますし、執筆者はその人物に関する研究者としては第一人者なので講演を依頼する時などのヒントが得られます。

表題には出ませんが、「大名・旗本・領主」の項目を調べれば、大岡・山岡・戸田氏など近世の領主が理解できます。「寺子屋」の項目を調べれば、師匠などの名前がわかります。

各自の視点で調べてください。「論文・聞き取り」、執筆者の順に記しました。

『茅ヶ崎市史研究』全32号

(昭和51年10月～平成19年3月刊行)

創刊号

「後北条氏被官後藤氏について」佐藤博信
 「茅ヶ崎地域における養蚕業の展開過程」上山和雄
 「小山房全の略歴」事務局
 「茅ヶ崎市内に現存する大名・旗本墓碑一覧」山口金次

第2号

「神奈川県改進黨と菊池小兵衛、明治20年代の地方政治状況」小風秀雅
 「高座郡茅ヶ崎村の屋号とその由来1、南湖地区」水越梅二
 「『伊勢道中日記』について」圭室文雄
 「二階堂氏と懷島・大井庄」佐藤博信

第3号

「大庭御厨と「義朝濫行」」五味文彦
 「幕末期の土地保有と農家経営、相州高座郡堤村広瀬家の分析」大口勇次郎
 「高座郡茅ヶ崎村の屋号とその由来2、本村・十間坂・茶屋町・鳥井戸地区」水越梅二

第4号

「江戸幕府鉄砲場切り開き一件史料、佐々木卯之助判決文によせて」阿部征寛

第5号

「刷新派と神奈川県政、明治後期における非政友勢力の再編過程」藤村浩平

第6号

「茅ヶ崎地域における寺子屋の概況」藁品彦一

第7号

「明治期における茅ヶ崎地域の俳句」藁品彦一
 「上正寺所蔵の中世史料について、長慶天皇綸旨二通の紹介を中心に」佐藤博信

第8号

「地方政治家の政治活動と選挙費用、山宮藤吉をめぐって1」上山和雄

第9号

「明治期における茅ヶ崎地域萩園村の俳句」藁品彦一

「地方政治家の政治活動と選挙費用、山宮藤吉をめぐって2」上山和雄

「茅ヶ崎地域における近世の領主たち1」神崎彰利

第10号

「萬鉄五郎の茅ヶ崎風景」大畑哲
 「萬鉄五郎の絵画、茅ヶ崎時代を中心に」山梨俊夫

「土井別荘「松潮園日誌」1」高村直助・東哲郎

「地方政治家の政治活動と選挙費用、山宮藤吉をめぐって3」上山和雄

「茅ヶ崎地域における近世の領主たち2」神崎彰利

第 1 1 号

「明治大正期における茅ヶ崎地域の青年団活動」 藁品彦一

「土井別荘「松潮園日誌」 2」 高村直助・東哲郎

「地方政治家の政治活動と選挙費用、山宮藤吉をめぐって 4」 上山和雄

「茅ヶ崎地域における近世の領主たち 3」 神崎彰利

「鶴田栄太郎氏年譜および著作目録」 和田久徳

第 1 2 号

「地方政治家の政治活動と選挙費用、山宮藤吉をめぐって 5」 上山和雄

「土井別荘「松潮園日誌」 3」 高村直助・東哲郎

「茅ヶ崎郷土史研究の回顧」 鶴田栄太郎

「写真集『茅ヶ崎きのうきょう』を読んで、学童疎開の思い出」 市川カツエ

第 1 3 号

「昭和初期における鶴嶺小学校の教育」 藁品彦一

「町三役と町会議員の変遷、戦前期の茅ヶ崎町と町政 1」 大西比呂志

「山宮藤吉自叙伝」 山宮正敬

「山宮藤吉自叙伝、解題」 上山和雄

第 1 4 号

「町制期の町会議員変遷について、戦前期の茅ヶ崎町と町政 2」 東哲郎

「水嶋善太郎著『小和田郷土物語』」 藁品彦一

「上山和雄著『日記にみる日本型政治家の源流、陣笠代議士の研究』」 大西比呂志

第 1 5 号

「昭和 5 年、茅ヶ崎小学校の教育、土屋マサの日記から」 加藤清

「弧松庵の団十郎」 小風秀雅

「回想、絵と私」 三橋兄弟治

「藤井銀蔵著『老いてのたわごと』、見上保

『教師名利の日々』」 和田久徳

「野崎薫『ふるさとの緑をたずねて』」 藁品彦一

「茅ヶ崎市柳島自治会・五三会編『柳島うつりかわり』」 二見まさ子

第 1 6 号

「日中戦争・太平洋戦争における戦死者の諸相」 平山孝通

「戦争碑の諸相、茅ヶ崎市内の碑を対象として」 小俣晴俊

「元アメリカ陸軍第 7 8 工兵大隊伍長ルイス・ハイマン氏聞き取り」 栗田尚弥・大西比呂志

「相模湾防衛軍関係者の聞き取り」 中根一彦

「萬鉄五郎との絆、『萬鉄五郎一土沢から茅ヶ崎へ』に触れつつ」 三橋兄弟治

第 1 7 号

「元工兵隊第 1 6 大隊本田梅吉氏に聞く、関東大震災復旧工事について」 加藤清・東哲郎

第 1 8 号

「伊豆大川三島神社の棟札、相州柳島藤間宗源入道」 川城三千雄

「鶴田桃世著句集『土に生きて』、同歌集『続つゆくさ』、浅岡康明著『酔想記』」 藁品彦一

第 1 9 号

「終戦後における茅ヶ崎地域の青年会」 藁品彦一

「茅ヶ崎の空襲アンケート報告」 向井孝允

「茅ヶ崎の選挙 1、普選期の衆議院議員選挙」 大西比呂志

第 2 0 号

「布川元氏に聞く、満州開拓とシベリア抑留の体験」 藁品彦一・中根一彦・東哲郎

「東京家庭学校所蔵資料の整理報告—家庭学校と茅ヶ崎—」 齋藤薫

「米山一夫著『父が子らに語るわが人生』」 藁品彦一

「市史の窓（ラチエン通りと桜道）」 平山孝通

第 2 1 号

「茅ヶ崎の選挙 2、普選期の町会・県会議員選挙」 大西比呂志

「家庭学校と茅ヶ崎 2、茅ヶ崎にできた感化院」 田沢薫

「「布川元氏に聞く」に寄せて」 山宮正敬

第 2 2 号

「『明治の巡査日記一石上憲定「自渉録」』をめぐって」高村直助・東哲郎

「書評『明治の巡査日記一石上憲定「自渉録」』」大畑哲

「茅ヶ崎の選挙3、戦後期の衆議院議員・県議会議員選挙」大西比呂志

「家庭学校と茅ヶ崎3、茅ヶ崎分校の子どもたち」田沢薫

「『三橋兄弟治作品集、追悼文集』によせて」三橋英子

第 2 3 号

「茅ヶ崎の選挙4、戦後期の市長・市議会議員選挙」大西比呂志

第 2 4 号

「茅ヶ崎と映画、地域イメージを中心に」加藤厚子

「南湖院開設前後の高田畊安、その医学的業績」大島英夫

「キャンプ・チガサキの思い出—鈴木貞司氏に聞く」（解説）栗田尚弥

「藤間柳庵編『年中公触記録』（茅ヶ崎市史史料集第2集）」西川武臣

「『ちがさき歴史の散歩道』によせて」細井守

第 2 5 号

「高田畊安と父・増山守正」大島英夫

「茅ヶ崎市政の回顧、元市助役深川六郎氏に聞く」茅ヶ崎市史編集委員会・大西比呂志

「水越梅二編『水越良介遺稿集、塵の外』について」藁品彦一

第 2 6 号

「高田畊安と徳富蘇峰、畊安から蘇峰への書簡を読む」大島英夫

「茅ヶ崎市史ブックレット第3集、萬鉄五郎と茅ヶ崎の風景」山本幹雄

「マリア・テレゼ・パーシェの回想、ベルリンから茅ヶ崎へ」大西比呂志

第 2 7 号

「高田畊安と本郷教会」大島英夫

「篤農家と農業技術改良、野中静雄家農業日誌を事例として」市川大祐

「木村義雄将棋名人と茅ヶ崎、木村義徳氏に聞く」茅ヶ崎市史編集委員会・大西比呂志

「写された銀幕、大庭ぬま氏寄贈史料について」加藤厚子

「和田篤太郎日記（茅ヶ崎市史史料集第4集）を読んで」岩田みゆき

第 2 8 号

「南湖院療養の日々、高田増平の日記から」大島英夫

「戦争体験を聞く、岩沢辰雄氏」茅ヶ崎市史編集委員会、（解説）柴田貴行

「南湖院 高田畊安と湘南のサナトリウム」を読んで」大島登志彦

「藁品彦一先生を偲んで」茅ヶ崎市史編集委員会

第 2 9 号

「南湖院と女性医師、日本女医会と高田畊安」大島英夫

「火薬廠から海軍へ、内藤興氏に聞く」茅ヶ崎市史編集委員会、（解説）柴田貴行

「自動車隊下士官の従軍体験、井出忠吉氏に聞く」茅ヶ崎市史編集委員会、（解説）栗田尚弥

第 3 0 号

「華族の別荘生活、茅ヶ崎土井利剛別荘「松潮園日誌」を読む」島本千也

「姥島の潜水漁に従事して、内藤貞子・松下国枝氏に聞く」茅ヶ崎市史編集委員会、（解説）市川大祐

「松竹照明部での日々、八鍬武氏に聞く」茅ヶ崎市史編集委員会、（解説）加藤厚子

第 3 1 号

「茅ヶ崎の別荘図、景観と別荘人の横顔」東哲郎

「南湖院看病学講習所、三橋カヨ氏・小野間正氏に聞く」茅ヶ崎市史編集委員会、（解説）大島英夫

「キャンプ・チガサキのガードとして、高田吉雄氏に聞く」茅ヶ崎市史編集委員会、（解説）栗田尚弥

第32号

「『茅ヶ崎市史研究』総目次（創刊号～第31号）」

以上、論文・聞き取りのタイトルと執筆者・編者を記しました。茅ヶ崎市民の誰もが知る歴史上の有名人から、庶民まで多様な人々の事績を少しずつ積み重ねて茅ヶ崎の歴史が紡がれたことがご理解できたかと思います。今後も微力ですが、できるならば茅ヶ崎人の歩みを記録し続けたいものです。

最後に、最近の新聞記事をご紹介します。

亀井工業の亀井文夫相談役（82）が、『神奈川新聞』の平成27年6月1日から8月31日にかけて、63回、生い立ち、湘南高校時代の思い出、家業に専念された経過などを詳細に記しておられます。毎回写真も掲載されています。すでに数葉は『市史』に掲載させていただきました。亀井工業のみならず、茅ヶ崎の土木事業に関する業績を記したものです。南湖院にも触れています。書籍になる日を楽しみに待ちたいと思います。石原慎太郎元都知事とは高校の同級生で大変親しい様子が伝わってきました。

もうお一人は、作曲家で歌手の平尾昌晃さん（78）です。27年12月14日から25日にかけて『朝日新聞』夕刊の「人生の贈りもの、わたしの半生」で9回に渡りインタビューに答えます。「茅ヶ崎で、泳いだり、バーベキューをしたり」と楽しげな様子が述べられています。名曲「霧の摩周湖」は、海辺の茅ヶ崎で想像して作曲されたそうです。

新聞記事で思い出しましたが、中日ドラゴンズの山本昌広投手が昨年、引退されました。スポーツ新聞は当然、一般紙でも大きく報道されたことが印象に残っています。いつの日か、山本投手の業績を「茅ヶ崎スポーツ史」に纏める人が現れることを期待します。

以上、4部に分けて「茅ヶ崎人物史外伝」を記してみました。重複の人物もありますが、執筆された方によって視点が異なりますので、それ

ぞれ収録しました。

ご紹介できなかった方もたくさんおられますが、茅ヶ崎ゆかりの人物を大きくとらえることはできたと考えています。

あくまでも私案ですが、『茅ヶ崎市史』などに掲載の人物1570人を300人程にしぼりました。御批評を賜れば幸いです。

（平成28年3月3日桃の節句に記す）

追記

『茅ヶ崎市史研究』の続編である『ヒストリアちがさき』にも人物論が満載ですのでおすすめします。「南湖院」や「藤間柳庵」に関わる論考に興味を覚えました。

「美術」に関わる人物は美術館に、「芸能」や「民俗」「柳田国男」に関わる人物は、文化資料館にお願いしましょう。『文化資料館調査研究報告』にも人物論が散見していますのでご参照ください。

もし、全ての茅ヶ崎ゆかりの人物に関心がある方は、『茅ヶ崎市史研究』『ヒストリアちがさき』に掲載の「茅ヶ崎市史文献目録」収録の8300点余の文献を検討されることをおすすめします。

今後課題は、「独歩」「漱石」「らいてう」らの外伝を課題としましょう。

今回も茅ヶ崎市育委員会文化財保護担当、市文化資料館、ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の関係者に感謝します。特に、白沢礼子さん・須藤格さんのご指導に感謝します。

*茅ヶ崎市文化生涯学習課市史編さん担当